ADVANCE 北海道医療大学広報誌
2023 MARCH
No.180

理学療法学科 卒業研究発表会の様子

医療技術学部の歩みと大学院開設

北海道医療大学 医療技術学部長　幸村 近

月日の経つのは早いもので、本学で一番新しい学部学科である医療技術学部臨床検査学科がスタートして4年が過ぎました。入学式が行われたのは平成最後の月でした。年号はその後すぐに令和に変わり、このたび令和5年・2023年3月に最初の卒業生を送り出します。4月、1期生である彼らは新たな一歩を踏み出します。来年創立50周年を迎える本学の長い歴史の中で、新しいページに名を刻むことができたことを光栄に感じています。そして先達のご苦労にあらためて敬意を表したいと思います。

2019年に開設された医療技術学部臨床検査学科ですが、1年も経たないうちにCOVID-19が流行し、今に続くコロナ禍が始まりました。急遽導入することになったオンライン講義を含めた教務内容や講義室の調整、学外臨地実習の受け入れ制限のための自習課題の作成など、不規則な対応を迫られました。2期生は入学式も中止となり、5月の連休明けから遠隔授業が始まりました。初めて学年全員が登校したのは夏休み明けの定期試験という状況でした。その後3期生、4期生まで、マスクを取った顔を見ることなく過ごす日々が続いています。それでも学生、教職員が一体となった頑張りで、学部として完成年次をついに迎えることができました。

そこで次のステップとして、大学院（医療技術科学研究科、修士課程）を設置することになりました。臨床検査分野における高度専門職業人の育成が目的です。超高齢化や新興感染症などによる疾病構造の変化、Society 5.0へのシフトと医療AIの進歩など、医療を取り巻く環境の劇的な変化に対応できる臨床検査技師を育成することが急務になっています。臨床検査領域での新規課題を的確に読み取り、予防医学、AIやロボット技術、感染制御などの最新の知識・技術を修得し実践する能力が必要になります。そうした人材を育成することによって臨床検査分野が進歩することが、地域社会の発展と人々の幸福につながると期待されます。

このような背景を踏まえ、医療技術科学研究科では生体機能解析学、病態情報解析学、血液病態解析学、免疫細胞生物学、感染生物学、遺伝子関連検査学、分子細胞病理学などの臨床検査学における専門分野について、学部教育で修得した基礎的能力を発展させるためのカリキュラムを組みました。さらに、社会のニーズや医療分野の課題を視野に入れ、新たな臨床検査の技術・方法を研究する素地を身に付けさせたいと思います。このような教育・研究を推進するため、本学の既存の各学部・研究科、関連諸学問分野の先生方と連携を取らせていただければ幸いに存じます。

本学科卒業生からの進学が決まっている者が3名おります。医療技術学部1期生として卒業する彼らが、大学院生としても先陣を切り、新たな歴史を切り開いてくれるものと信じています。

CONTENTS

医療技術学部の歩みと大学院開設 ―― 1
定年を迎える先生からのメッセージ ―― 2
新任教員紹介 ―― 3
2022年度 理事長表彰について
2022年度 地区別懇談会を開催、多数のご出席ありがとうございました。 ―― 4
2022年度 就職相談会を開催しました。
教員研究活動報告 ―― 5
同窓会活動状況 ―― 6
薬学部薬学科3年次後期「医療福祉活動演習（在宅）」実施報告 ―― 8
大学体験 REPORT ―― 9
OB・OG訪問［福祉マネジメント学科］ ―― 10
インターネットによるご寄附が可能です ―― 11
TOPICS ―― 12
EDITOR'S NOTE

Message 定年を迎える先生からのメッセージ

薬学部 教授
西 剛秀

定年退職にあたって

2019年4月から本学薬学部の創薬化学講座に赴任してから、あっという間の4年間でした。この間お世話になりました学長、副学長をはじめ、教職員の皆様、本学関係者の皆様、学生の皆様には、心より厚く御礼申し上げます。

この4年間を振り返ると、最初の1年目は講義資料の準備等に追われ、職場に慣れることで精一杯でした。2年目からはようやく大学での生活にも慣れ、本格的に研究も開始することができましたが、新型コロナウイルスの感染拡大があり、オンラインでの講義や分散登校など、学生との人的交流が疎遠だったのは残念だった気がします。また、懇親会や新年会、忘年会もほとんどなかった3年間でしたので、大学関係者の皆様と飲み会を通じて仕事以外のお話があまりできなかったことも心残りです。

1980年に北海道大学薬学部の伴義雄教授が主宰されていた薬品製造学講座に4年生の卒業研究で配属となり、有機合成化学の世界に足を踏み入れ、修士課程修了後に三共（株）（現・第一三共（株））の化学研究所に入社し、2019年から2023年の北海道医療大学勤務まで延べ43年間、全く途切れることなく有機合成化学の現場で過ごし、大病もせずに健康で定年を迎えられることは、この上もない喜びであります。思い返せば、多くの良き先輩、後輩、同僚、友人や家族に支えられてきた43年間で、本当に素晴らしい方々と出会い、恵まれた環境で楽しく研究生活を送ることができました。

日本は世界で第3位の新薬創出国ですが、医薬品の輸出入額は2015年から連続2兆円超の貿易赤字が続いています。また科学分野での国別Top10%補正論文数も2000年までの第4位から今や12位にまで後退しており、科学技術立国としての地位がどんどん低下しています。新薬を創出するためには、優れた人材の育成が不可欠で、大学もその責任の一端を担っている重要な教育機関だと思います。北海道医療大学に赴任してからわずか4年間ではありますが、学生のモラルや学力の低下をはじめ、研究者としての人材育成が充分に出来ていない薬学部6年制の弊害というのも肌で感じ、日本の将来、北海道医療大学の未来に不安を感じたのも事実です。

4年間の皆様方のご厚情に感謝するとともに、北海道医療大学のレベル向上と発展を祈念致します。有難うございました。

歯学部 教授
川上 智史

歯学部教授退任にあたって

令和5年3月末をもって歯学部教授を退任いたします。思い起こせば、昭和59年3月本学歯学部（1期生）を卒業、直ちに歯学部歯科保存学第2講座（現在のう蝕制御治療学分野）に助手として入職以来、39年間教育・臨床・研究に従事させていただきました。学生時代を含めると人生の2/3以上を本学とともに歩んできました。昭和59年当時は、大学病院で数年研修を受けて、開業医に勤務、その後故郷に戻って開業かなあくらいの漠然とした将来像を描いていたと思います。それがなぜこんなに長く教員生活を送ることとなったかを考えてみると教員として、歯科医師として、尊敬でき、目標となる恩師との出会いがあったからだと思います。その出会いは、教員になって2年目の秋、昭和60年9月のことです。

北海道大学の助教授から当講座に教授として赴任された松田浩一先生との出会いでした。この出会いが私の人生を大きく変えることとなりました。まだその頃は、学習者が主役の歯科医学教育の考え方や他職種（現在では多職種）と連携した歯科医療の提供といったことが定着どころか、あまり考えられていない時代でした。松田先生は、いち早くそれらの考え方や手法を本学に取り入れ実践へと進められました。それを間近で見て聴いて経験させていただいたことが、今日までの教員人生に多大な影響を与えています。松田浩一先生は、平成15年1月18日に急逝されましたが、先生の教えを心のよりどころとして教育・臨床・研究に励んできました。素晴らしい恩師の教えを胸に刻んで今日まで微力ではありますが、医療人教育に貢献できたのではないかと思っています。医療系総合大学である本学、母校で教員生活を終えることができることはこの上もない幸せと心から感謝しております。本当にありがとうございました。

最後に、医療・介護・福祉の分野で多くの卒業生が活躍している姿をみることは、教員冥利に尽きることです。本学の益々のご発展を祈念いたします。

心理科学部 教授
中野 倫仁

心理科学部の開設から21年

2000年9月8日に当時の土産田常務理事、高橋憲男教授から医療大に新しい学部を作り、心理職の国家資格者を養成するので赴任して欲しいとの要請があった。精神科臨床において質の高い心理療法の必要性を痛感していたこともあり、2002年4月新設の心理科学部教授として札幌医大神経精神科より異動した。当時は心理職の国家資格化は数年以内に実現すると聞いていた。

あいの里キャンパスで臨床心理学科と言語聴覚療法学科の2学科体制で発足したが、臨床心理学科の医師教員は1人であったこともあり、関係する講義が多く、講義前日は夜中の12時まで準備することが多かった。札幌医大の外来は継続し、本学の大学院生の論文のデータを取らせてもらっていた。専門分野を拡大したかったが、老年精神医学分野以外から声がかからず、職場のメンタルヘルスが辛うじて加わった。老年期に関心を持つ学生・院生は必ずしも多くはなかったが、その後活躍している卒業生を見ると少しは貢献できたと思っている。

2012年に学部長になり、あいの里から当別キャンパスへの学部移転の話が出てきた。結局2015年から2019年にかかる学年進行の移転となり、言語聴覚療法学科はリハビリテーション科学部に移った。大学院の相談業務はあいの里に残ったため、教員には教育・研究に多大の負担をお願いしていることは申し訳ないと思っている。移転時から臨床心理学科が定員割れとなったのは残念なことだった。

明るい話として2018年から国家資格（公認心理師）が発足することになり、学部と大学院のカリキュラムを改正し、最終的に2022年で完成を迎えた。OB・OGを対象にした公認心理師試験対策講座を2年間実施し、その内容の高さはいささか自負している。公認心理師試験の合格率も本学は好調であり関係者の努力に敬意を表したい。

2020年で学部長を退任した後は、もう一度研究に力を入れたいと思っていたが、コロナ禍で思いはかなわなかった。

結果的に21年間在職することになり、多くの教職員の方々にはこの間大変お世話になりました。学部教員も学内外から広く集まり、その中に卒業・修了生も加わって、後輩の指導を担当していることはうれしい限りです。最後に医療分野に強い臨床心理学の北の拠点として本学の更なる発展を祈っております。

歯学部 教授
遠藤 一彦

北海道医療大学の益々の発展を願って

月日の経つのは早いもので、昭和62年4月に本学歯学部に講師として着任してから36年が経過し、本年3月に定年を迎えることになりました。36年間の教員生活を振り返ってみますと、何度も困難に直面したこともありましたが、多くの教員や職員の皆様に支えられ、何とか定年まで健康で教育と研究を続けることができました。共に仕事をさせていただいた生体材料工学分野の同僚をはじめ歯学部教員の皆様、関係した教職員の皆様に心から御礼申し上げます。

私が本学に着任した当時は、薬学部と歯学部の2学部しかありませんでした。現在では6学部9学科を擁する医療系総合大学に発展しています。当別キャンパス内には健康科学研究所、20周年記念会館、中央講義棟などが次々と建造され、新医療人育成の北の拠点に相応しい大学となっています。

本学は間もなく創立50周年を迎えますが、未だに当別キャンパス周辺にはJRの駅くらいしか大きな建造物はなく、大学は森と田圃に囲まれた佇まいのままです。通学や通勤には大変不便ですが、私はこの自然豊かなキャンパスが気に入っています。春にはわたなべ山に咲き誇るカタクリやエゾエンゴサクなどの可憐な花々、初夏には日中のゼミ、夜のカエルの大合唱、秋の夜にはキリギリスやコーロギなどの小さな虫たちが奏でる音楽を楽しむことができます。特に秋の夜遅く、駐車場周辺の草むらで開催される星空演奏会では、様々な虫たちが美しい声を競うかのように響かせ、指揮者もいないのにそれらが自然に調和し、まるで室内楽のしらべのように聞こえてきます。秋の虫たちから迸る生命の証は、どのような楽器の音色よりも私の心に響いてきます。

大学は学生、教員、職員で構成されています。三者が三位一体となり、この自然に恵まれた素晴らしいキャンパスで、地域医療への貢献と国際社会での活躍を目指して精力的に活動することにより、北海道医療大学が夜空に燦然と輝く星の光に導かれるように発展し続けることを願っています。

以上の諸先生の他、
薬学部 青木隆 教授、堀田清 准教授、千葉智子 講師、
歯学部 塚越慎 講師、
看護福祉学部 西基 教授、大友芳恵 教授が定年を迎えられます。
ありがとうございました。

With heartfelt thanks.

薬学部 教授
青木　隆

薬学部 准教授
堀田　清

薬学部 講師
千葉 智子

歯学部 講師
塚越　慎

看護福祉学部 教授
西　基

看護福祉学部 教授
大友 芳恵

新任教員紹介

新任教員

令和4年9月12日付

心理科学部（臨床心理学科）	助教	上河邉 力

令和4年10月1日付

歯学部（口腔機能修復・再建学系〈歯周歯内治療学〉）	任期制助手	江端 一馬

2022年度 理事長表彰について

2022年度の理事長表彰式が、当別キャンパスにおいて1月6日（金）に執り行われ、鈴木理事長より表彰状が授与されました。理事長表彰は、特に表彰の価値があると認められた方を対象に授与するもので2022年度は以下の方が表彰されました。

笠師 久美子 ＜薬学部・特任教授＞

2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックにおいて選手村総合診療所のチーフファーマシストの重責を務められ、その際にボランティアとして活躍した薬剤師への調査結果をまとめた論文（筆頭著者）が、英国の権威ある学術雑誌である「British Journal of Sports Medicine」に掲載された。

学校法人東日本学園後援会

地区別懇談会、各種事業開催報告等
学校法人東日本学園後援会 https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/koenkai/

2022年度 地区別懇談会を開催、多数のご出席ありがとうございました。

3年ぶりに開催しました今年度の地区別懇談会は、10月1日（土）から11月6日（日）までの期間、全国15地区17会場（右表参照）で開催し、563組788名の保護者の皆様にご出席いただきました。（出席率15.5%）

各会場では、個別面談（学生生活全般に係るご相談）を実施し、担当教員との熱心な個別相談が行われました。ご参加いただいた保護者からは「しばらく開催されず、大学との距離があったように思えたが、子供の情報が聞けて大切な機会となった」、「とても親身に分かりやすく説明していただき、安心して子供をお願いできると思った」などのお声を頂きました。

後援会は、学生のサポート役、保護者の皆様と卒業生、学園とをつなぐパイプ役として、また、学園の牽引役として組織の強化、地区支部の活性化、学生生活関連助成、同窓会活動支援等を柱とし、学生生活における快適な環境をつくることを大きな目的として事業活動を推進しています。地区別懇談会は、後援会が「保護者の皆様と学園をつなぐ貴重な架け橋」として最も力を入れている事業活動のひとつであり、皆様により一層ご満足いただけるよう、内容の更なる充実に向け、今後も改善を図って参りますので、温かいご支援、ご理解とご協力を賜り、来年度もぜひご出席くださいますようお願い申し上げます。

開催地	開催日	出席者数	
		大学・大学院	専門学校
仙　台	10月1日（土）	10組	—
広　島	10月1日（土）	6組	—
青　森	10月2日（日）	16組	—
大　阪	10月2日（日）	17組	—
函　館	10月8日（土）	28組	—
苫小牧	10月9日（日）	34組	—
北　見	10月9日（日）	29組	1組
帯　広	10月15日（土）	43組	1組
那　覇	10月15日（土）	9組	—
釧　路	10月16日（日）	33組	2組
福　岡	10月16日（日）	3組	—
旭　川	10月29日（土）	53組	2組
盛　岡	10月29日（土）	13組	—
東　京	10月30日（日）	22組	—
札　幌	11月6日（日）	234組	7組
小　計		550組	13組
合　計		563組	

2022年度 就職相談会を開催しました。

2022年度オンライン就職相談会が各学部・専門学校で開催され、新型コロナウイルス感染防止のため、オンラインでの実施となりました。各団体の部門責任者・人事担当者の皆様にご参加いただき、学生に対して就職や業界に関する説明・相談等を行っていただきました。

できる限り相談・質問の機会を多く設けるため、事前に参加団体から学生へ説明資料を提供いただき、対話中心の形式で実施しました。団体様からも「学生と直接やりとりする時間がたくさんあり良かった」、「一方向の説明で終わることなく、会話をすることで学生の考えを知る良い機会となった」とのお声も頂きました。参加した学生は、この貴重な機会を存分に活かそうと、真剣な表情で積極的に質問をしながらコミュニケーションを図るなど、とても有意義な時間となりました。

本学では各学部に就職委員会を設置し、就職ガイダンスや専門講師を招いての各種セミナーを数多く実施するなど、学生がより親和性の高い就職先に就職できるよう、教職員が一丸となってきめ細やかな指導をしております。

本学のキャリア支援について https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/syusyoku/

開催日	対象	団体数	参加団体
2022年 7月9日(土)	歯科衛生士 専門学校	13団体	●歯科医院・病院
2022年 7月15日(金)	福祉キャリアフェスタ （福祉マネジメント学科・ 臨床心理学科）	31団体	●地方自治体・官公庁 ●施設・社会福祉協議会 ●病院・クリニック 他
2022年 10月1日(土)	リハビリテーション 科学部	157団体	●病院・クリニック ●介護老人保健施設 他
2022年 11月9日(水)	オンライン業界 研究セミナー （臨床心理学科）	12団体	●地方自治体・官公庁 ●サービス業・小売業 他
2023年 2月17日(金)	薬学部	167団体	●病院・クリニック ●薬局・ドラッグストア ●製薬 他
2023年 3月9日(木)	臨床検査学科	42団体	●病院・クリニック ●検査センター ●製薬・医薬卸 他

北海道医療大学病院 病院長　北市 伸義 教授

ぶどう膜炎の新たな原因ウイルスの世界初の確認について

本学附属の北海道医療大学病院 病院長 北市伸義教授の研究グループが、ぶどう膜炎の新たな原因ウイルスを世界で初めて確認しました。

「ぶどう膜炎」は、視力低下や失明の原因となり、患者の不可逆的QOV（Quality of Vision:視覚の質）低下をもたらす疾患です。ぶどう膜炎の原因としていくつかの病原体や疾患が知られていますが、ほとんどがヘルペスウイルス科によると考えられてきました。今回、ヒトアデノウイルス感染によると考えられる重篤なぶどう膜炎の症例2件を世界で初めて報告します。いずれも眼内液からPCR検査でヒトアデノウイルスDNAが検出され、ウイルスゲノム解析から症例1は臨床報告が稀なC種6型、症例2はこれまで臨床報告がないD種新型によると判明しました。ぶどう膜炎全体のうちの約4割が原因不明とされていますが、アデノウイルス感染によるものが含まれていた可能性があります。この2件の症例におけるアデノウイルスの感染経路や網膜炎症発生機序は未解明ですが、今回の発見は、適切な治療法の選択や網膜壊死を伴うぶどう膜炎の理解への貢献が期待されます。

本研究成果は2023年2月2日（木）、アメリカ眼科学アカデミー機関誌「Ophthalmology」に掲載されました。

薬学部　笠師 久美子 特任教授

韓国で開催されたアンチ・ドーピング機構フォーラムに日本代表として参加しました

本学薬学部 薬学教育推進講座の笠師久美子特任教授が、2022年10月29日（土）に韓国ソウルの梨花女子大学にて開催された、KADA韓国アンチ・ドーピング機構のフォーラムに日本の代表として参加しました。

笠師特任教授は第一部の「アンチ・ドーピング活動と薬剤師の職能拡大の必要性」をテーマに、チェ・ミヨン氏（韓国薬剤師会副会長）、イ・ジョンハ氏（前テルン選手村医務室長）、キム・ナラ氏（前器械体操国家代表）と共にパネリストとして登壇しました。

日本では、2009年に日本アンチ・ドーピング機構（JADA）が公認スポーツファーマシスト制度を立ち上げ、12,345名（2022年4月1日現在）が認定されています。韓国では、国全体でアンチ・ドーピング活動の推進に力を入れていますが、まだ薬剤師に向けた教育プログラムが実施されていない状況です。今回のフォーラムでは、韓国におけるアンチ・ドーピング活動の現状と今後の方向性、日本の公認スポーツファーマシスト制度の成り立ちや現状について、日韓のアンチ・ドーピング機構と韓国の薬剤師を交えて意見交換が行われました。来年から韓国薬剤師会が中心となって、韓国でも薬剤師の教育プログラムを開始するとのことで締めくくられました。

薬学部　三浦 桃子 助教

生き物らしい動きを捕らえる視知覚の発達過程を解明 ～自閉スペクトラム症（ASD）の発症機構の解明に期待～

薬学部の三浦桃子助教、北海道大学の松島俊也名誉教授（元大学院理学研究院教授、本学学外研究員、トレント大学客員教授）、北海道大学大学院理学研究院の田路矩之博士及び和多和宏教授らの国際共同研究グループは、卵の中の胚にニコチン性アセチルコリン受容体（nAChR）の伝達を阻害・攪乱する薬（ネオニコチノイドなど）を投与すると、孵化したヒヨコに自閉スペクトラム症（ASD）に類似した視知覚障害が現れることを発見しました。

今後、ヒヨコの視知覚障害のメカニズムを研究することによって、ASDの発症機構の解明に寄与すると期待されます。

なお、本研究成果は、2022年11月18日（金）公開のCerebral Cortex Communications 誌にオンライン掲載されました。

医療技術学部　江本 美穂 講師

ニトロキシドの反応性に対する立体異性の影響 ～生体適応性に優れた分子の設計を目指して～

医療技術学部の江本美穂講師、本学先端研究推進センターの藤井博匡客員教授、神戸薬科大学 薬品物理化学研究室の東里沙さん（博士課程学生3年）、山﨑俊栄講師、佐野紘平准教授、宗兼将之特任助教（現 金沢大学 助教）、向高弘教授は、大阪大学大学院基礎工学研究科 赤羽英夫准教授との共同研究で、2, 4位ジ置換TEMPO型ニトロキシドの還元反応性に対する立体異性の影響を明らかにし、2, 4位ジ置換TEMPO型ニトロキシドの生体内での反応性は置換基と立体異性によりコントロールできる可能性を示しました。TEMPO型ニトロキシドは酸化ストレス疾患の診断・治療への応用が期待される化合物であり、今後、ニトロキシドの立体異性や置換基を考慮することで、優れた診断薬・治療薬の設計・開発につながるものと期待されます。

本研究成果は、2022年11月26日（土）に、国際科学誌Free Radical Biology and Medicine への掲載に先立ち、web上で公開されました。

薬学部
同窓会長
桂　正俊

薬学部

〈創立年:1979年　会員数:約6,370名〉

薬学部同窓会は6,000名を超える会員が全国各地で活躍をしております。現在同窓会の活動は、新型コロナウイルス感染症の影響で、主にwebを利用した医療薬学セミナーや将来ビジョン講座などを薬剤師支援センターと共催で行っております。また、コロナ禍の中でリモート授業が続いている同窓会準会員である在学生に対して、薬剤師国家試験対策講習会の追加や実務実習のケーシー代の補助など様々な支援を行っております。

一方、昨年は全国17支部（道内7、道外10）と医療薬学セミナーやその地域での薬業や医療に関する情報交換を行っているところです。今年度は全国の会員を対象とした拡大研修会を開催したいと考えております。薬学部同窓会は会員数の増加により、道内支部の細分化と道外の卒業生が減少していることから本州支部の統合やブロック化も含めて現在検討しております。

今後は、コロナ禍以前に開催していた「卒業生・在学生合同懇談会卒業生」や「大学教員とも情報交換会」など感染予防対策をしっかり行い、徐々に開催をしたいと考えております。

■https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~phalumni/
■yaku-dousoukai@hoku-iryo-u.ac.jp

歯学部
同窓会長
蓑輪　隆宏

歯学部

〈創立年:1984年　会員数:約3,312名〉

親愛なる会員の皆様並びに関係各位の方々におかれましては、平素本同窓会の活動に際し、深いご理解と多大なるご尽力を賜っておりますこと心から感謝し深くお礼申し上げます。

歯学部では、この春40期生が社会に羽ばたき、46期生がめでたく入学され準会員として本会のメンバーに加わります。「会員の福祉と親睦併せて学術向上にそして本学部の発展に寄与すること」を目的とする歯学部同窓会は現在全国に3,000名を超える会員で組織されて、来年設立40周年を迎えます。

行動規制緩和によって明るい兆しの見える今、この度のコロナウイルス感染症対策の経験によって得ることのできたリモートによる会議や学術講演会開催などの新たな方法も活用しながらより良い学術活動を続けてまいります。また、再開された歯学部学生の海外短期留学への援助などの学生支援活動も、同窓会の重要な役割だと考えております。

「お口は健康の窓口」我々の口腔医療は健康を支える医療です。そして、薬学、看護、福祉、心のサポート、回復へのお手伝い、これらの総合力によってこの健康を守ることができます。これからもその責任を皆様と共に果たしていきたいと存じます。是非、仕事も学びも肯定的解釈で頑張りましょう。

平穏な生活は、まわりの方々のおかげにより成り立っていることに感謝して、皆様のご活躍とご多幸を心からお祈り申し上げ、歯学部同窓会としての挨拶とさせて頂きます。

■http://www.hoku-iryo-u.com/
■dousoukai-honbu@clock.ocn.ne.jp
■事務局 札幌市北区北6条西6丁目2-11 第3山崎ビル4F
TEL 011-299-9069　FAX 011-299-9609

看護学科
同窓会長
川村　武昭

看護福祉学部／看護学科・札幌医療福祉専門学校／看護学科

〈創立年:1997年　会員数:約2,700名〉

平素より同窓会活動については、格別の御理解と御協力を賜り厚く御礼申し上げます。おかげさまで本会（福慧会）の活動も令和9年（2027年）で30周年を迎える運びとなりました。偏に日頃から御尽力をいただいている同窓生の皆様をはじめ、各学部学科の同窓会役員の皆様、そして大学関係者の皆様の協力の賜です。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

さて、今年度の同窓会活動も昨年度に引き続きコロナ禍の影響を大きく受けた一年でした。会員（卒業生）及び準会員（在学生）に向けたセミナーの開催中止をはじめ、会報誌の発行やホームページの運営・管理にも影響が及びました。社会的には「withコロナ」に向け着実に前進していますが、私たち同窓会役員自身が医療従事者として各地域の保健医療教育等の現場を支えるエッセンシャルワーカーの一員であることを考えると、大変遺憾ではありますが、現状、致し方のないことと捉えております。

このような状況下ではありますが、今年度およそ3年ぶりに同窓会役員会をwebで開催し、現在、コロナ禍における今後の同窓会活動の展開について意見交換を継続しているところです。まずは例年5月に開催してきた同窓会セミナーの再始動について協議しているところですが、合わせて、これまで同窓会活動の根幹と考えてきた「同窓会名簿」の発行に係る協議や本活動を安定的に継続するための体制づくりに関すること、そして活動の担い手となる後任候補の選定など、いつも役員会では話し合う内容が尽きません。

同窓会の活動として表面化するまでもう少し協議する時間が必要なテーマも少なくありませんが、コロナ禍を経た今だからこそ、将来を見据えた活動を維持・展開していけるよう、今は足元固めに力を入れたいと考えております。4年後に控える活動30周年を一つの節目、目標達成の年と設定し、集合することの意味やその必要性を考慮しながら、webの利点も活用することで会員との双方向性の交流が図れる仕組みを整えていきたいと考えております。今後も引き続き福慧会をどうぞよろしくお願い致します。

■https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~kango/
■kango@hoku-iryo-u.ac.jp

臨床福祉学科
同窓会長
小畑　友希

看護福祉学部／福祉マネジメント学科・札幌医療福祉専門学校／介護福祉学科

〈創立年:2000年　会員数:約2,186名〉

2023年は看護福祉学部設立から30周年を迎えます。当同窓会も医療福祉学科、臨床福祉学科卒業生と、札幌医療福祉専門学校介護福祉学科卒業生と合わせて2,000名を超える大所帯となりました。また、2022年4月に学科名が変更されましたので今後は福祉マネジメント学科卒業生も加わることになります。

さて、新型コロナウイルスの出現はこれまでのやり方を急激に変化させました。例えば役員会もリアル会議からオンライン会議が通常になりました。オンラインでは遠方や他の会議の直後でも参加できる良さもありますが、リアルでは同じ空気感で共有できるかけがえのない良さがあります。中高生のための医療ソーシャルワーカーセミナー「病院ではたらく相談のしごと」体験講座は、7月と10月に、リアルとオンラインのそれぞれの良さを活かしハイブリッド形式で開催致しました。

さらに、集合型の臨場感と手軽さを融合させ、身近な同窓生と大学の先生が集う小規模同窓会企画を新事業として立ち上げていきたいと計画しています。コロナ禍でも分散型の小さな集まりで、懐かしい恩師や友人からエネルギーチャージすることを応援できればと思います。

時代の変遷とともに同窓会活動もイノベーションしなければなりません。今後とも皆様のご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

■https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~fukudo/
■fukudo@hoku-iryo-u.ac.jp

臨床心理学科
同窓会長
上河邉　力

心理科学部／臨床心理学科

〈創立年:2006年　会員数:約650名〉

平素より同窓会活動への格別のご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

当同窓会では、昨年度までに構築したIT技術を活用した運営体制を活かし、在校生や卒業生の皆様方へ向けた様々な活動を今年度も実施してまいりました。

まずは、例年実施してきました心理学とその関連領域をテーマとして同窓会セミナーの開催です。YouTubeライブを活用したオンライン配信は多くの皆様方にご好評をいただき、全2回のセミナー視聴者数は300を超えました。特に、医療大学以外の心理学を学ぶ学生や医療大学出身ではない専門職の方々のご参加が半数以上を占めており、大学の広報にも大きく貢献できたのではないかと感じています。

また、コロナ禍にあって以前のように集まりあって歓迎会を実施できない在校生の事情を知り、今年度は同窓会が中心となってZOOMを活用した新入生歓迎会を実施しました。在校生が1人も参加してくれなかったらどうしようかという不安もありましたが、嬉しいことに、新1年生を含む28名の在校生が参加してくださいました。

その他にも、オンラインでの就職相談会の開催や公式LINEを活用した情報発信など、昨年度から取り入れた新しい同窓会活動にも一層磨きをかけています。来年度は、同窓会セミナーに対面方式も復活させ、オンラインとのハイブリッド開催も検討しています。当同窓会は、これからも同窓生の皆様方のために決して止まることなくサポートを継続します。引き続きご支援を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

■https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~p.dousou/
■shinri-dousoukai@hotmail.co.jp

理学療法学科
同窓会長
武田　智洋

リハビリテーション科学部／理学療法学科

〈創立年:2017年　会員数:約300名〉

平素より理学療法学科同窓会の活動にご理解ご協力をくださり、誠にありがとうございます。日頃から活動に対して積極的にご協力頂いている同窓会役員をはじめ、他学部同窓会の皆様、本学関係者の皆様には改めて御礼申し上げます。

本学に理学療法学科が開設されてから10年が経ち、今年は7期生が社会人デビューを果たしました。今年もまた「北海道医療大学」から「理学療法士」が誕生したことを嬉しく思っております。これまでの卒業生は北海道内のみならず、全国各地の医療機関や福祉施設等で活躍しています。7期生の皆さん、初めての仕事で慣れないことや多くの悩みが生じることがあるかと思います。そのような時は身近にいる卒業生に声をかけ、些細なことでも相談してみてください。きっと後輩である皆さんのことを優しく支援し、心強い存在となってくれるはずですよ。同窓会としても卒業後のサポート体制をさらに充実させていきたいと考えています。卒後教育の一環として、各分野において著名な先生や当学科教授を招いてのセミナー開催を企画しています。知識・経験が豊富な先生による講演や、学生時代を知る先生にだからこそできる相談など、「明日につながる」内容を求め、実践していきたいと思っております。

引き続き後援会の皆様をはじめ、他学部同窓会の皆様にご指導を頂きながら、本学の発展、同窓生のさらなる活躍の一助となるべく活動をして参りたいと思います。

■https://iryoudaipt.web.fc2.com/　■iryoudaipt@gmail.com

作業療法学科
同窓会長
田丸　仁啓

リハビリテーション科学部／作業療法学科

〈創立年:2017年　会員数:約210名〉

作業療法学科同窓会は、開設より7年目を迎えます。設立初年度より顧問である作業療法学科近藤里美教授、他学部同窓会役員の皆様には多大なるご支援を賜り、心より御礼申し上げます。現在は約210名の同窓会員で活動しており、今後も毎年30～40名とまだまだ少ない会員数の期間が続きます。少人数という特徴を活かして密に連携をとりながら、当同窓会が同窓生、在学教員、在学生のつながる場としてあり続け、発展していくことを願っております。昨年度もCOVID-19の流行により同窓会活動も大きく制限されることになりました。その中でも少しでも同窓生への還元をするべく、7月には以前本学にて講師を務められておりました北海道大学の澤村大輔先生にご協力を頂き、「リハビリテーションのための画像の見方～高次脳機能障害を中心に～」と題しご講演を頂きました。参加された同窓生からは満足度の高い感想も聞かれ充実した時間を過ごすことが出来ました。今後も厳しい社会情勢が予測されますが、どうかこの状況をいち早く打開すべく、医療人として日々新しい情報を取り入れ行動していくことが非常に重要であると改めて考えさせられました。今年度も同窓生の皆様へ還元できるよう同窓会セミナー等の開催も検討して参ります。

最後に北海道医療大学後援会の皆様、各同窓会役員の皆様のご理解、ご協力の下に当会の運営が成り立っていますことに深く御礼申し上げます。

■https://www.ot40-jp.webnode.jp/
■hokuiryodai.ot@gmail.com

言語聴覚療法学科
同窓会長
石黒　恵美子

心理科学部・リハビリテーション科学部／言語聴覚療法学科・札幌医療福祉専門学校／言語聴覚療法学科・言語聴覚療法専攻学科

〈創立年:1994年　会員数:約1,391名〉

当会は札幌医療福祉専門学校の言語聴覚療法学科の第1期卒業生により設立され、今春も新たに卒業生をお迎えしています。「同窓会セミナー」の企画・運営と年に2回の会報の発行を通し現役生・卒業生の皆様への情報提供を中心に活動してまいりましたが、昨年に続き今年度も新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、主な活動を休止し会計管理と会員データのメンテナンスを行っております。

言語聴覚療法学科単独での同窓会セミナーは休止中ですが、今年で16回目となる他学部同窓会と合同開催の「口から食べられる理想に向かって」をテーマとした講演会の企画運営を継続しております。毎回2名の講師をお招きし、卒業生他関連職種の皆様が参加され、お陰さまで毎回好評をいただいております。このAdvanceが皆様のお手元に届く頃には、無事に講演会が終了し、来年度の開催についての話し合いが始まっていることと思います。引き続き多くの皆様にご参加いただけることを願っております。

最後に、この場をお借りし北海道医療大学後援会の皆様・内外の先生方のご理解・ご協力を賜り運営を行えていますことに、深く御礼申し上げます。

今後も同窓会活動を通じて皆様のお役に立てるよう、役員一同努力して参ります。

■st-kai@hoku-iryo-u.ac.jp

北海道医療大学同窓会支部等連絡先

■薬学部

支部名	支部長(期)
札幌支部	多田　正人(4)
道北支部	沼野　達行(10)
十勝支部	石原　敦(3)
道南支部	吉田　元(12)
釧根支部	羽田野　貴志(11)
オホーツク支部	森谷　俊憲(13)
日胆支部	寺口　元(6)
青森支部	三上　章(1)
栃木支部	豊住　暢臣(17)
茨城支部	青木　邦子(4)
北越支部	杉本　雅規(3) ※支部長代理
神奈川県支部	萩原　秀男(5)
東海支部	高尾　信彦(2)
関西支部	山口　和俊(9)
中四国支部	黒長　正明(9)
九州支部	山田　昌人(3)
沖縄支部	村田　成夫(4)

■歯学部

支部名	支部長(期)	連絡先
北海道支部連合会	佐藤　明理(4)	医療法人社団明雄会そのまち歯科 ☎011-387-8811
青森県支部	佐藤　孝治(2)	佐藤歯科医院 ☎0172-36-0412
岩手県支部	高野　玄(18)	高野歯科クリニック ☎0197-23-2488
宮城県支部	郷家　道彦(10)	郷家第二歯科医院 ☎022-223-3306
秋田県支部	石川　承平(14)	いしかわ歯科・矯正歯科 ☎018-887-3988
山形県支部	芳賀　俊和(5)	芳賀歯科医院 ☎0238-84-8107
福島県支部	外島　昭夫(7)	ホワイト歯科医院 ☎024-875-3232
茨城県支部	秦　博文(2)	社会医療法人愛宣会ひたち医療センター歯科 ☎0294-37-0713
栃木県支部	亀田　智(4)	亀田歯科 ☎0282-55-5118
群馬県支部	※前支部長ご逝去のため、後任は現在未定	
埼玉県支部	青木　聡(7)	あおき歯科医院 ☎049-256-2220
千葉県支部	寺山　功(4)	葉山歯科医院 ☎0471-64-6480
東京都支部	蛯名　勝之(5)	エビナ歯科医院 ☎03-3200-4818

支部名	支部長(期)	連絡先
神奈川県支部	阿部　智彦(2)	阿部歯科医院 ☎045-953-7676
山梨県支部	安田　伸一(13)	やすだデンタルクリニック ☎055-243-8461
長野県支部	小池　文一(2)	小池歯科医院 ☎026-224-1482
新潟県支部	山下　克弥(9)	わかば歯科医院 ☎0258-83-1010
富山県支部	藤川　晃(5)	藤川歯科医院 ☎0764-83-2231
石川県支部	久保　伸一郎(2)	粟津歯科医院 ☎0761-44-4852
愛知県支部	木村　英雄(1)	このめ歯科医院 ☎052-451-1182
京都府支部	堀内　光一(10) ※支部長代理	堀内歯科医院 ☎0774-21-4016
近畿地区	瀧本　智朗(17)	とも歯科医院 ☎06-6654-6831
広島県支部	神原　滋(6)	明王台クリニック ☎084-952-2281
四国支部	谷本　良司(3)	医療法人谷本歯科医院 ☎0883-42-2069
九州支部	清川　宗克(3)	清川歯科・口腔外科クリニック ☎092-822-8805
沖縄県支部	玉城　均(1)	ながた歯科医院 ☎098-854-1182

■看護福祉学部

☎0133-23-1211
○**看護学科**(内線:3641)担当:明野(実践基礎看護学講座)
○**福祉マネジメント学科**(内線:3708)担当:池森(介護福祉学講座)

■心理科学部・リハビリテーション科学部

☎0133-23-1211
(学務部 心理科学課・リハビリテーション科学課)
○**臨床心理学科**　○**作業療法学科**
○**理学療法学科**　○**言語聴覚療法学科**

歯科衛生士専門学校
同窓会長
梶　美奈子

歯学部附属歯科衛生士専門学校

〈創立年:1991年　正会員数:約1,313名、準会員:26名、特別会員:8名〉

平素より、同窓会活動へのご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。2019年末から始まったCOVID-19は、2022年を過ぎても猛威を振るい、マスクのある生活自体が普通に感じられています。諸外国ではマスク着用なし、国内の観光地を見ても外国人の姿が増えてきました。街中の賑わいとは裏腹に臨床の場では、一層気を引き締めなければなりません。

多くの卒業生が臨床の場で活躍し、学生さんの臨床実習先でも日々学生教育に関わっております。「青春ってすごく密なので」という言葉が今年の新語・流行語大賞にノミネートされました。学生さんたちにとっては、若く楽しい時期に同じ学舎で過ごした仲間との時間は何事にも代え難いものだと思います。学校で、臨床実習先で同窓生たちは、より安心・安全に学び、実習が行えるようにサポートしてきました。色々な制約のある中で一生懸命学ぶ学生さんたちを卒業生は一丸となって指導していると思います。学生さんたちを取り巻く環境は一昔前と大きく変わっていますが、同窓生は変わらず、温かく見守っております。

さて、2022年度本会の活動は、他学部の皆様と協力して行う「コラボ☆講演会」から始まり、2021年に引き続きwebによる歯科衛生士セミナーを開催しました。参加していただいた方々からは、「大変良かった」と、お言葉をいただきました。また、理事会や総会もwebで開催することができましたので感染の心配や危険なくスムーズに意見交換することができました。ICTを活用し、時間や距離の制約無しにたくさんの方々とお知り合いになることができるようになりましたが、それでもそろそろ「密」が恋しく感じられます。

■https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~katakuri/
■okahashi@hoku-iryo-u.ac.jp

歯学部附属歯科衛生士専門学校同窓会支部連絡先　北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校　☎0133-23-1211(内線:3482)担当:大山・岡橋

卒業生を対象とした各セミナー・公開講座に関するお問い合わせ先　学術交流推進部 地域連携課　☎0133-23-1129(直通)　E-mail:nice@hoku-iryo-u.ac.jp

在宅医療に、なぜ薬剤師が必要か。現場で活躍する卒業生の講義や、附属施設と連携した実習から学びます。

かつては薬局や病院の中で働くイメージが強かった薬剤師ですが、在宅医療、災害医療、スポーツ医療などの分野でもニーズが高まっています。本学薬学部ではそんな社会的要請に応えるべく、「医療福祉活動演習」を2～6年次に開講。「在宅」「コミュニケーション」「スポーツと医療」「福祉」「地域活動」「災害医療」「チーム医療」の7コースを設置した独自科目です。今回はその中でも、3年次後期「医療福祉活動演習（在宅）」にフォーカス。コーディネーターである浜上尚也教授にお話を伺いました。

薬学部薬学科 教授／
本学地域包括ケアセンター 兼担教員
浜上 尚也

1986年、北海道医療大学卒業。同大学院に進み、同薬学部助手に。カリフォルニア大学（アーバイン校）特別研究員、同薬学部講師・准教授を経て、2021年より現職。研究テーマは「神経変性疾患と病態マーカー」。パーキンソン病の診断・治療を効果的にする評価方法を開発し特許を取得。「患者を知り、薬学を知る」というモットーから、在宅医療に関する研究も行う。博士（薬学）、日本赤十字社安全法指導員、北海道社会教育委員連絡協議会理事、北海道スポーツ推進委員協議会副理事長。趣味はスキー。スキー指導員、スキーパトロール指導員の資格も持つ。

薬を服用する人が、そこにいる限り。

在宅医療の重要性が高まっている中、そこに携わる薬剤師のニーズも急増しています。活躍する分野や場所こそ、かつての薬剤師像と異なりますが、薬を服用する人がそこにいる限り、薬剤師には責任があります。在宅医療で薬剤師が求められるのは、必然かと思っています。

「医療福祉活動演習（在宅）」では、在宅医療を実践する本学薬学部卒業生の講義や、「フィジカルアセスメント」「一次救命処置」「症候学」を学ぶ演習、そして、本学「地域包括ケアセンター」と連携した見学実習などを通して、在宅医療における薬剤師の役割を学びます。体験的な機会を豊富に設けていることが特色で、2022年度は9月5日に開講しました。

卒業生が来学し、経験談を語る。

10月3日には、在宅医療を実践する本学薬学部卒業生の方々3名が来学し、講義を行ってくださいました。アイン薬局の小島多加志先生、ファミリークリニックさっぽろ山鼻の深堀泰弘先生、そして、時計台薬局の石丸竜大先生です。

在宅医療や地域包括ケアシステム、介護保険制度などの概要のご説明に加えて、ご自身の経験談もお話しいただきました。経験豊富だからこそ語れるテーマの中には、ターミナルケアに携わったケースのご紹介も。学生からは、「薬剤師の職域の広さを実感した」、「薬剤師を目指す自覚を再認識した」という声が数多く聞かれました。また、「卒業後も専門性を高めることが大切」、「薬を飲んでいない患者さんはいない。薬を飲めないのである」という先生方の言葉も強く印象に残ったようです。

在宅医療に必要な、実践力を習得する。

在宅医療では、利用者さんのもとへ薬剤師がひとりで訪問するケースが多くなります。そのため、患者さんの身体の状況を的確に把握したうえで、タイムリーな処置・対応が必要。そのためには、プラスアルファの知識や技術が欠かせません。

10月17日は、フィジカルアセスメントを学びました。講師は本学薬学部卒業生であり、あしたば薬局の大澤祐貴子先生。血圧、心拍数などバイタルサインの測定方法を学び、学生同士での演習も行いました。処方された薬が効いているかどうか、測定した数値からわかることもあります。薬の有効性を的確に評価し、医師などと連携してケアを行うために、薬剤師にもフィジカルアセスメントの知識と技術が必要です。

10月24日のテーマは、一次救命処置。私自身が日本赤十字社安全法指導員の資格を持っており、指導員仲間の方々にもご協力いただきました。心肺蘇生法などに関する知識を学ぶ講習と、シミュレーターを活用した実技の演習を実施。受講した学生は、赤十字ベーシックライフサポーターの資格も取得しました。

そして、11月7日は、私が導入したくて止まなかった「症候学」。昭和大学の木内祐二先生、亀井大輔先生をお招きしました。症候学とは基礎医学の一分野であり、薬学部で学べるのは全国的にも珍しいこと。症状を手がかりに疾患や病態を探る学問で、在宅医療では必要不可欠と考えます。たとえば、頭痛を訴える患者さんがいたとします。どこがどのように痛いかなどによって、風邪の場合もあれば、脳疾患などの疑いも。そのため、アセスメントで疾患や病態を探り、的確に対応しなくてはなりません。木内先生、亀井先生は、グループワーク形式の演習を取り入れながら、症候学の意義を学生に伝えてくださいました。

フィジカルアセスメント、一次救命処置、そして、症候学。すべてが在宅医療に携わる薬剤師には欠かせない分野。受講した全員が、そう感じてくれたようです。

日本赤十字社安全法指導員による心肺蘇生法の演習

附属施設と連携した、貴重な現場体験。

本学「地域包括ケアセンター」での見学実習を控えた12月12日、事前学習が行われました。講義を行ってくださったのは、本学薬学部卒業生であり株式会社MKファーマシー代表取締役の桂正俊先生と、本学看護学科の教員であり、地域包括ケアセンター兼務の竹生礼子先生。多職種連携、地域包括ケアシステムの概要から、同センターの役割、訪問看護師、ケアマネジャーの業務内容までをご説明いただきました。また、実習で見学するポイントや医療人としてのマナーについても指導を行いました。

本学地域包括ケアセンターと連携した見学実習

そして、12月19日から28日、履修した学生が同センターの訪問看護師やケアマネジャーに同行し、実際の在宅ケアを見学しました。利用者さん1名に対して、学生1名。受講した学生が21名ですから、のべ21名もの利用者さんにご協力いただきました。在宅医療の拠点が学内にあり、利用者さんとの深い信頼関係があるからこそ実現できる、本学ならではの貴重な現場体験といえます。同センターのスタッフの方々は、薬学部生のために、薬に関する質問も利用者さんに尋ねてくださいました。ほとんどの学生が、在宅医療における薬剤師の必要性を実感し、「将来は在宅医療に携わってみたい」と答えてくれました。

より体系的な教育で、たしかな対応力を。

在宅医療や多職種連携を学ぶ科目は、薬学部に限らず、「全学連携地域包括ケア実践演習」をはじめ全学で開講されています。今後は科目間の連動性を強化するなど、より体系的な教育体制の構築を目指します。また、私は本学地域包括ケアセンターの教員でもありますので、同施設の教育資源をより有効活用できるよう努めていきます。体験的な機会は、学生の意欲をさらに高めると考えています。

そして、私は本学卒業生のひとりでもあります。時代の変化や、その場で求められることに柔軟に対応できる、優れた医療人を育てていきたいと思っています。在宅医療を含め、学生のうちに多彩な分野を体験することで、どんな現場でも求められる、たしかな対応力が育まれていくはずです。

大学体験 REPORT

本学では、社会貢献の一環として、模擬講義や職場体験実習といった中・高大連携事業を実施しています。

札幌開成中等教育学校 特別講義を実施。

2023年1月10日(火)・11日(水)の2日間にかけて、本学当別キャンパスにて札幌開成中等教育学校の3年生14名を対象とした「プレ先端科学特論」を開講しました。

1日目は、先端研究推進センターの太田亨教授による講義を受講し、遺伝学の基礎である遺伝子やゲノム構造、遺伝子解析などを学びました。また、午後は口腔粘膜遺伝子解析を体験。専門的な実験道具を用いながら、口腔粘膜の採取やPCR反応を体験しました。

2日目は、看護福祉学部看護学科の塚本容子教授による講演を受講。『その後の、コロナ感染症』と題した講演を聞き、コロナ感染症への正しい理解と知識、マスクの着用方法を学びました。午後は岩手医科大学の徳富智明准教授による演習を受講。遺伝性疾患の理解を通して医療で用いる家系図の重要性について知るとともに、自動家系図作成ソフト「f-tree」を用いて家系図を作成し、さらに理解を深めました。また、いわて東北メディカル・メガバンク機構イノベーション推進・人材育成部門 吉田明子特命助教が認定遺伝カウンセラーの業務内容や資格取得について講演。全国に350名程度しかいない遺伝カウンセリングの専門家の講演に、参加された生徒の皆さんも興味を持った様子でした。

プログラムの最後には、1日目に採取した自分のDNAを解析するとともに、タマネギからDNAを採取し、糸状のDNAを実際に目で見て確認しました。

参加された生徒の皆さんは、最初は緊張した面持ちを見せたものの、プログラムが進むにつれて笑顔を見せながら実験に参加したり、講師に自ら質問するなど、研究所ならではの講義や体験を通して、知識と関心を深めていました。

札幌市立高等学校 模擬講義を実施。

2023年1月6日(金)、札幌市立高校(札幌旭丘高等学校、札幌開成中等教育学校、札幌清田高等学校、札幌啓北商業高等学校、札幌新川高等学校、札幌平岸高等学校、札幌藻岩高等学校、札幌大通高等学校)の学生9名が、本学当別キャンパスで開催の「医療系進学ガイダンス」に参加しました。このプログラムは、大学と高等学校の教育活動(授業等)に対する相互支援を目的として行われたものです。

本学概要説明とキャンパス見学を行った後、看護職コースとリハビリテーション職コースに分かれ、模擬講義を行いました。高校での授業とは異なり、各職種の専門領域から職業についての理解を深めるなど、大学ならではの講義に積極的に参加する姿が見受けられ、教員とコミュニケーションを取りながら受講する姿が印象的でした。今回の体験学習プログラムの経験が将来の進路選択・決定の一助となることを願っています。

札幌北高等学校 職場体験実習を実施。

2023年1月6日(金)、札幌北高等学校1年生13名が本学当別キャンパスを訪れ、職場体験実習を実施しました。従来は大学病院でのインターンシップを実施していましたが、新型コロナウイルス感染症対策の観点から実施がしばらく見送られ、本年度は本学実習施設を活用しての実施となりました。薬剤師・看護師・公認心理師・理学療法士の4グループに分かれ、体験実習を行いました。薬剤師グループでは現場で活躍する卒業生から保険薬局での業務についての講話、注射剤の混合調製などの体験実習を実施。看護師グループでは術後患者を想定したバイタルサイン測定体験、多職種カンファレンスのデモンストレーションの見学など、現場さながらのプログラムに生徒の皆さんは真剣な眼差しで参加していました。それぞれの業務における役割の学習や本学における職場体験実習の経験が、生徒の進路意識や医療関連分野への関心を高めることにつながることが期待されます。

OB・OG訪問

看護福祉学部
福祉マネジメント学科 編

今回は本学卒業生5人が一度に登場する欲張りな企画です。
放課後等デイサービス「ホワイトラーニング」（運営：株式会社one fy）で児童指導員として働く卒後2～4年の5人を紹介します。

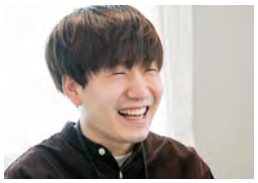
ホワイトラーニング（札幌市手稲区）児童指導員

増川 汐音さん
（2021年3月卒業）
「就活中に、先輩の就職先ということで見学に来て、職員と子どもたちのいい表情で決めました」

山谷 珠実さん
（2021年3月卒業）
「同窓生は聞きやすい、言いやすい、心強い存在。“医療大あるある”で盛り上がることもできます（笑）」

安保 麻湖さん
（2019年3月卒業）
「スタッフ全員正社員（意外に珍しい）という点と、センスの良いwebサイトが転職の決め手でした」

岡田 耕祐さん
（2020年3月卒業）
「いまは『地に足をつけて』を意識して仕事しています。足場が固まったら新たな挑戦スタートです」



氏家 直紀さん
（2020年3月卒業）
「就活中『株式会社で福祉』が新鮮に感じられ、福祉の新しい側面を学びたいと飛び込みました」

スタッフ平均年齢約27歳

札幌市郊外、周囲の住宅に溶け込んだシンプルな2階建てのホワイトラーニングは放課後等デイサービス。6～18歳の障がいや、発達に特性のある子どもを対象に、放課後や長期休暇中に学習のサポートや自立、充実した生活に向けた支援を提供する児童福祉の施設です。一つの建物に3事業所が入り、1日に合わせて35～45人の児童が来所します。

築2年の建物内部は、ホワイトラーニングの「子どもたちの素直な気持ちの“白”を守る」の理念そのままの空間。余計な色、装飾がなく、行動や想像力が制限されない自由を感じます。そして、代表含め17人のスタッフの平均年齢は約27歳。本学卒業生のほか保育や初等教育、介護などさまざまな分野の若い専門職がのびのび働いています。ちなみに、多彩な経験を積むために児童養護施設から転職した安保さん以外の本学卒業生4人は新卒での採用です。

「全力で楽しませろ!」

ホワイトラーニングのモットーは、全力で子どもたちを楽しませること。そのために本学卒業生も自ら楽しく仕事をしています。もちろん、楽しさの陰では安全や個々の特性に最大限の目配りをしています。

朝出勤したら全員で隅々まで清掃・消毒、学習ドリルやレクリエーションなどの準備をし、授業終了時間に子どもたちを学校まで車で迎えに行きます（手稲区・西区・北区）。1時間半ほど子どもたちと密度の濃い時間を全力で過ごした後（この間に連絡帳の記入も）は各家庭まで車で送り届けます。体力的にも、運転や子どもを預かる責任で精神的にもハードであろうと尋ねると、「夏の水遊び、冬のそり遊び後の送迎はしんどいですよ」（氏家さん）の声に大きくうなずく他の4人。でも、その表情は…明らかに楽しんでいます。

仕事のやりがいは「特別な場面じゃなく日々の中にある」で全員一致。「毎日の積み重ねで小さな目標でも子どもが達成できたとき」「帰るときの楽しかったという表情。今日もやってよかった!と毎日思う」。どの言葉にも、家庭、学校とは別の、子どもが安心できる第3の居場所を自分たちが工夫して作っている自負がうかがえます。

資格取得、起業、昇進

5人はそれぞれ自分の未来像についても未知数ながら考え始めていました。「いつかは就労支援×パン屋で起業」（安保さん）、「ニーズの高い地方で、児童デイサービス・就労支援・ケーキ屋を組み合わせて、子どもが就労するまでの流れを作りたい」（増川さん）と起業派もいれば、「当社の資源を存分に生かして、新規事業の立ち上げに関わる存在に」（岡田さん）と社内で高みをめざす考え方もあります。

そのためにも「まずは資格でしょう」（山谷さん）と、全員がさらなる資格取得を意識しています。なかでも現場職員の指導や助言を行うリーダー的存在である児童発達支援管理責任者は若手にはあこがれの資格です。また、安保さんは保育士資格をめざしています。

福祉の仕事の面白さと多様な選択肢を見せてくれる5人はそれぞれキャラは違っても一様に前途洋々。後輩に刺激を与える、いい意味での型破りも期待できそうです。

取材日は節分。3グループ全体での豆まきのリハーサルでは、最後に現れて鬼を一掃する「神」の着付けと、子どもたちに徹底するルールを確認しました。まくのは豆にみたてて小さく丸めた新聞紙。この日に向けて子どもたちと大量に作りました。

※5人の卒業時の学科名称は臨床福祉学科。※業務中は常時マスク着用ですが、撮影時のみマスクをはずしています。

インターネットによるご寄附が可能です

学園では、皆様からのご寄附を教育研究活動や施設設備の整備、学生支援ほか学園環境の充実のために活用させていただいています。
インターネットを通じてパソコンやスマートフォンなどから簡便にご寄附いただけます。
引き続き皆様からの温かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

STEP 1 本学ホームページの「企業・一般・卒業生・保護者の方へ」をクリック。

STEP 2 その他の「ご支援をお考えの皆様へ」をクリック。

STEP 3 左側の「寄附のお申し込み」をクリック。

寄附の種類

●特に使途を指定されない場合は、学校法人東日本学園全般の教育・研究・学習環境の充実、キャンパス整備、教育・研究活動の支援などに広く活用させていただきます。

●特定の使途に限定してご寄附いただくことも可能です。インターネットによるご寄附の入力ページには以下の項目を設けております。

①教育環境や学生支援制度の充実のため
②研究活動および研究者支援のため
③キャンパスの環境整備および学園の施設整備のため
④医療機関の施設設備充実のため
⑤その他

※新型コロナウイルス感染拡大により、経済的に厳しい環境に置かれることとなった学生さんを支援するため、「コロナ対策学生応援プロジェクト」を展開中です。この制度は、寄附の目的を当該プロジェクトと指定していただけると、お預かりした寄附金を、支援を必要とする学生さんに直接給付するものです。

記念品の贈呈

本学では、10,000円以上をご寄附いただきました個人の方に、金額に応じてWEB芳名録への記載と記念品をお送りいたします。

ロイズ ショコラの四季

ハンドタオル

ピュアモルトペン

	100,000円未満	300,000円未満	300,000円以上
WEB芳名録	●	●	●
ロイズ ショコラの四季（専用箱入）	●	●	●
ハンドタオル（大学名入）		いずれか希望する一方	●
ピュアモルトペン（大学名入）			●

※10,000円以上のご寄附をいただいた個人の方が対象となります。
※土地・建物・金銭にかかるご寄附をいただいた方が対象となります。
※WEB芳名録は専用ページを開設いたします。ご希望されない場合は掲載いたしません。

インターネットによるお申し込み（クレジットカード・コンビニエンスストア・Pay-easy）

パソコン、スマートフォンなどからアクセスし、煩雑な手続きを経ずご寄附いただけます。
なお、インターネットによるお申し込みは、学園が寄附の決済代行を委託している株式会社エフレジの「F-REGI寄附支払い」を利用したお手続きとなります。

スマートフォンからのご寄附のお申し込みはこちら。

https://kifu.f-regi.com/contribute/hoku_iryo_u

銀行振込によるお申し込み

金融機関ATMやネットバンキング、銀行窓口からご寄附いただけます。
寄附申込書をダウンロードするボタンから寄附申込書を印刷し、必要事項をご記入のうえ、以下のお問い合わせ先まで郵送またはEメールでお送りください。なお、電話連絡いただけましたら、郵送にて寄附申込書をお届けします。

税制上の優遇措置

個人、法人を問わず、寄附者の皆様には寄附金額に応じて寄附金控除を受けることができます。
詳細は、ホームページ左側の「税制上の優遇措置」からご確認ください。

ご寄附に関するお問い合わせ先　北海道医療大学 学術交流推進部　TEL 0133-23-1129　FAX 0133-23-1296　E-mail kyousui@hoku-iryo-u.ac.jp

TOPICS

薬学部「Student Pharmacist 認証式」を挙行しました

薬学部では、2023年度実務実習開始を前に、2023年2月3日(金)に「Student Pharmacist 認証式」を行いました。実務実習を行う158名の新5年生に対し、小林道也薬学部長から実習に向けた心構えなどについて話があった後、来賓としてご出席いただいた薬学教育協議会北海道地区調整機構の福土将秀委員長(札幌医科大学附属病院薬剤部長)、北海道薬剤師会の有澤賢二会長ならびに北海道病院薬剤師会の菅原満会長(北海道大学病院薬剤部長)よりご挨拶を賜りました。

Student Pharmacist 認証式の終了後には、本学薬学部に対して多大なご支援を頂いている薬学部同窓会の桂正俊会長(第12期卒)から激励の言葉を頂戴しました。

実務実習は1期が2月20日(月)～5月7日(日)、2期が5月22日(月)～8月6日(日)、3期が8月21日(月)～11月5日(日)、4期が2023年11月20日(月)～2024年2月11日(日)まで、それぞれ北海道内各地の病院と薬局に分かれて行われます。

チュラロンコン大学Allied Health Sciences学部・北海道医療大学リハビリテーション科学部 学術交流プログラムを開催しました

2022年12月12日(月)に、本学リハビリテーション科学部と学術交流協定校であるチュラロンコン大学Allied Health Sciences学部による学術交流プログラムが本学総合図書館大会議室で開催されました。チュラロンコン大学からは、Allied Health Sciences学部長補佐・Allied Health Sciences学部理学療法学科研究分野副代表のDr. Duangporn Suriyaamaritが来学し、本学の施設を見学、交流プログラムで講演いただきました。本学からは4名の教員が研究紹介を行い、活発な質疑応答がなされました。

この交流プログラムは2021年から開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により延期となっており、今回ようやく対面での開催が実現しました。今後、学生の短期研修派遣・受入れ等、両大学の更なる交流が期待されます。

SCP×後援会コラボ 試験勉強応援企画「合格祈願!応援メシ」

コロナ禍において苦境に立つ医療系学生の支援のためにと寄附いただいた白米約300kgを、後援会の協賛および学内食堂のエームサービスに協力いただき、ピラフや炒飯等に加工して、国家試験や定期試験等の勉強に励む学生に2023年1月23日(月)より無料で合計約3,000食を提供しました。

Special thanks／【お米の提供】■旭川市・Organic LAB ファーム ベッジ 代表 浅野様ほか【調理加工・諸費用補助】■エームサービス(学内食堂)■北海道医療大学後援会

EDITOR'S NOTE

編集後記であるので本来ならば本号の編集にまつわる裏話を書き記すのが私の役目であるのだが、いかんせん編集作業のほとんどすべてを入試広報課の方々に任せっきりにしているので、さしたるネタも持ち合わせていないのが実情である。ただ、それでも職員の方々のご苦労は手に取るようにわかる。実際、この原稿の締め切りが1月13日であるのに2月に入っても脱稿できない私に業を煮やしていることであろう。

ところで、この編集後記の執筆依頼と併せて次のような要請を受けた。「9月発行予定の次号(No.181)のOB・OG訪問につきましては、臨床心理学科の先生にOB・OG取材先のご調整をお願いさせていただければと存じます」。これについては遅滞なく紹介できそうだ。何しろ多くの卒業生・修了生が社会で広く活躍してくれているし、今年もまた多くの学生が巣立って行く。この時期、日本中の学校には一種独特な寂しさが漂っている。それは学校という舞台から多くの主役たちが去っていっていくためであり、ここに教員と学生との間の「教える・授かる」という関係は終わりを迎える。そして春から両者は社会人という一つの大きなカテゴリーで括られ、立場を同じくして接して行くことになる。いや、むしろ立場は逆転し、卒業生から多くを学ぶ機会を得ることになるかもしれない。

日々の業務内容から、仕事のこつや工夫していること、つらかったこと、苦労したこと、嬉しかったこと、やりがい、等々。どれも現場に出てみなければ得ることのできない経験ばかりである。そのような話を何人もの卒業生から聞くことができる。この学びをもたらしてくれる卒業生に深謝するばかりである。

(K.S 記)

ADVANCE
北海道医療大学広報誌 No.180

STAFF● 遠藤 泰　浜上 尚也　志茂 剛　飯嶋 雅弘
内ヶ島伸也　奥田かおり　鈴木 和　今井 常晶
齊藤 恵一　長谷川純子　児玉 壮志　田村 至
近藤 啓　高橋 祐輔　山形 摩紗　三浦 清志
三川 清輝　近田 卓哉

発 行 日● 2023年3月
編集・発行● 北海道医療大学広報部 入試広報課
〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757
TEL:0133-22-2113
https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/

広報誌についてのご意見・ご要望・情報等をお待ちしています。
E-mail:nyushi@hoku-iryo-u.ac.jp

■北海道医療大学の教育理念
生命の尊重と個人の尊厳を基本として、保健と医療と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、確かな知識・技術と幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人を育成することによって地域社会ならびに国際社会に貢献することを北海道医療大学の教育理念とする。